C 年大斎節第 2 主日　ルカ 13 章 31―35 節

［直訳］

31 そのときに　そばに来た　何人かのファリサイ派の人々が　言いつつ　彼に、
「出て行きなさい　そして　行きなさい　ここから
というのは　ヘロデは　望んでいる　あなたを　殺すことを」。
32 そして　彼は言った　彼らに、
「行って　言いなさい　その狐に、
見よ　私は追い出す　悪霊どもを　そして　いやしを　私は実行する
今日　そして　明日　そして　三番目（の日）に　私は完全なものにされる」。
33 ただ　定められている　私が　今日　そして　明日　そして　次（の日）に　行くことは、
というのは　ない　可能で　預言者が　死ぬことは　エルサレムの外で。
34 エルサレムよ　エルサレムよ、
殺すもの　預言者たちを
そして　石を投げつけて殺すもの　遣わされた者たちを　自分のもとに、
何回も　私は望んだ　集めることを　あなたの子たちを
ように　めん鳥が　その雛たちを　羽の下に、
そして　あなたたちは望まなかった。
35 見よ　見棄てられる　あなたたちに　あなたたちの家は
［だが］私は言う　あなたたちに、
決してない　あなたたちが見ることは　私を
あなたたちが言う［時が来る］まで、
『祝福された方　来る方は　主の名において』。

［新共同訳］

31 ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」32 イエスは言われた。「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。33 だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。
34 エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。35 見よ、お前たちの家は見捨てられる。言っておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決してわたしを見ることがない。」

①文脈

ⓐルカ福音書 9 章 51 節から 19 章 27 節ではエルサレムを目指すイエスの旅が描かれている。この旅の中でイエスは弟子の覚悟を説き、七十二人を派遣し、神への愛と隣人への愛、そして祈りを教える（九 57―一一 13）。イエスの力を信じられず天からのしるしを求める者が現れ、また、イエスから非難された律法学者やファリサイ派の人々はイエスを陥れようと狙う（一一 14―54）。イエスは弟子のあり方を教え、群衆には時のしるしを見分け、悔い改めるように求める（一二 1―一三 9）。安息日にいやしを行ったイエスは、たとえを用いて神の国について教え、狭い戸口から入るようにと諭す（一三 10―30）。

ⓑイエスはエルサレムへの旅の途中で、「律法学者とファリサイ派の人々への非難」を語っているが、このとき、すでにファリサイ派の人々はイエスに敵意を持ち始めており（一一 37―54）、イエスも「ファリサイ派の人々のパン種に注意しなさい」と注意を喚起している（一二 1）。31 節では、イエスから非難されたファリサイ派の人々が登場する。彼らは「ヘロデがあなたを殺そうとしている」と言って、イエスを立ち去らせようとするが、その言葉に彼らのイエスに対する無理解が表されている。

ⓒ34―35 節は「エルサレムへの嘆き」であり、並行箇所のマタイ福音書 23 章 37―39 節とほぼ一致している。マタイでは、イエスはすでにエルサレム入城を果たしており、神殿の境内で宗教指導者たちと論争を繰り広げたとき、律法学者とファリサイ派の人々を激しく非難してから、この「エルサレムへの嘆き」を語っている。そこではユダヤ教との決裂を示すものであり、この後にはエルサレム神殿崩壊の預言が続いている。しかし、ルカではイエスはまだエルサレムへの旅の途上にあり、この嘆きの後にもイエスは安息日にファリサイ派のある議員の家に食事のために入り、病人をいやす（一四 1）。

②構成

ⓐ 31―33 節

㋐イエスのそばに来たファリサイ派の人々はイエスに出て行くことを命じる。その理由は「ヘロデはあなたを殺すことを望んでいる」からである。「望む」と訳した動詞セローは、31 節に一回、34 節に二回用いられる。

㋑「行く」という動詞がイエスの行動を表すのに 2 回用いられている。31 節ではファリサイ派の人々がイエスに「行きなさい」と命じ、33 節ではイエスが自分自身について「行くことは定められている」と語る。同じ「行く」という行為であるが、その行為の背景にあるものは異なる。

ⓑ 34―35 節

㋐ 34 節では「望む（セロー）」を二回用いて、「私は集めることを望んだ」と「あなたたちは望まなかった」を対比することによって、神の意思と人々の思いの隔たりが示されている、

㋑ 35 節では「あなたたち」が繰り返され、神の意思に反する行動を取る「あなたたち」に対する裁きが述べられる。

③ここから出て行くのは―神が決めた道だから―（31―33 節）

ⓐファリサイ派の人々は、ヘロデがイエスを殺そうとしているからという理由で、イエスに「出て行きなさい、そしてここから行きなさい」と命じる。「行く」と訳した動詞ポレウオマイは「行く、歩く、進む、旅行する」を意味し、文脈によって「去る、出て行く、帰る、通る」の意味でも用いられる。

ⓑイエスはファリサイ派の人々に、まずヘロデに告げるべき言葉を語る（32節）。イエスは「悪霊どもを追い出し、いやしを実行する」。「実行する」と訳した動詞は単に「行う」の意味ではなく、「達成する・成し遂げる」という意味を持つ。32節四行目「私は完全なものにされる」には、「苦難によって完成される」の意味、あるいは「目的を達する」という意味が考えられている。イエスは今日も明日も悪霊を追い出し、いやしを成し遂げ、三番目の日に完全なものにされる。それはイエスが神から与えられた使命を果たし、死とそれに続く復活・昇天という栄光を与えられることを意味する。

ⓒこのヘロデに向けた言葉をイエスは言い換えている。33節一行目、「私が今日そして明日、そして次の日に行くことは定められている」には、31節二行目と同じ動詞「行く（ポレウオマイ）」が用いられている。新共同訳聖書では、31節を「ここを立ち去ってください」と訳しており、直訳の「出て行く」と「行く（ポレウオマイ）」を合わせて訳している。それに対して、33節は「だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない」と訳し、ポレウオマイを「進む」の意味に取っている。しかも「自分の道」は原文にはない言葉であり、翻訳上の補足である。

ⓓ33節のポレウオマイの解釈は分かれており、「（エルサレムへと）進む」の意味に取る者、また転義した意味に取り、死を表す婉曲用法として「逝く・死ぬ」の意味に取る者がある。いずれにしても、ファリサイ派の人々の意識は「出て行きなさい」「行きなさい」というように、動詞を繰り返して、イエスが「ここから」立ち去ることに向けられているが、イエスが「行く」と言う際には、立ち去った後に向かうべきところへと視線が向けられている。イエスはエルサレムへ、十字架の待つエルサレムへと進んでいく。

ⓔイエスは「ここから」出て、進まなければならない。しかし、それはファリサイ派の人々が言うように「ヘロデが殺そうとしているから」ではない。イエスがヘロデを「狐」と呼んでいるように、ヘロデの狡猾さは油断のならないものであっても、イエスの死を引き起こすだけの力は持ち合わせていない。33節一行目の「定められている」と訳した動詞デイには「…することが必要である・…しなければならない・…することになっている」という意味があり、神の決定を表す際に用いられる。イエスが「ここから出て、先へと行く（進む）」ことは神が決めた道である。33節二行目に示されているように、イエスは神の定めに従って、預言者としてエルサレムで死ぬ。

④神の意思に逆らう者たちへの裁き（34―35節）

ⓐ33節二行目の「預言者」が34節二行目に用いられ、預言者の死とエルサレムとの関係がここから述べられる。エルサレムは「預言者たちを殺すもの」「自分のもとに遣わされた者たちに石を投げつけて殺すもの」である。イエスは旧約の預言者たちと同じように、迫害を受け殺される。それによってエルサレムは神からの裁きを受けることが34―35節に述べられている。

ⓑ神は「あなたの子たちを集めることを何回も望んだ」。しかし、「あなたたちは望まなかった」。「何

回も」という嘆きが示すように、神は旧約の時代に預言者たちを繰り返し遣わし、神のもとへと立ち帰ることを求めたが、人々は神の思いを受け止めず、逆らい続けた。イエスは神の思いを現す最後の預言者である。そのイエスの言葉に聞くことをせず、回心を拒むことは「あなたたちの家」が滅びるという決定的な裁きを招く。「あなたたちの家は見棄てられる」とは、神殿が神によって見棄てられ、ユダヤの宗教が終わることを示している。

ⓒ35節の「主の名によって来られる方に、祝福があるように」は、詩編一一八編26節の引用である。イエスがエルサレムに入城する際、弟子の群れは神を賛美してこの句を叫ぶ（一九38）。そのとき、「ファリサイ派のある人々」はイエスに、「先生、お弟子たちを叱ってください」と願っている（一九39）。弟子たちの賛美を止めさせようとするファリサイ派の人々の試みは、ルカ福音書だけに見られる。34―35節の「エルサレムへの嘆き」との関連を考えるなら、ファリサイ派の人々が賛美を止めさせようとしたのは、イエスの嘆きを思い出し、イエスのエルサレム入城が彼らへの裁きの始まりだと気づいたからかもしれない。

ⓓ「祝福された方　来る方は　主の名において」の訳には次の二つの可能性がある。ヘブライ語には「主の名によって祝福する」という定型句がある。これに従って、「主の名において」を「祝福された方」につなげることもできる。この場合、「来る方」すなわち「メシア」は「主の名によって祝福されるように」の意味になる。また、「主の名において来る方は祝福されるように」と取ることもできる。「主の名において来る方（メシア）」とは「主によって主の意思を行うために遣わされた方」を表す。

⑤神の救いが現れるため

ⓐファリサイ派の人々はヘロデがイエスを殺そうとしていると告げる。イエスは確かに死ぬことになるが、それは今、この旅の途中ではなくエルサレムにおいて起こらねばならず、ヘロデによってではなく、神の救いの計画によって起こされる。33節で「定められている」と訳した動詞デイは、神の計画ゆえの必然性を表す。イエスがエルサレムへと向けられた自分の道を進むのは、神が決めた道だからである。

ⓑ神はかつて多くの預言者を遣わし、神に背いた人々を自分のもとに集めようと繰り返し試みた。それはめん鳥が雛を羽の下に集めるように、民を守り、命を与えるためであった。しかし、ユダヤの民は神が遣わした人々を石で打ち殺し、今また、最後に神が遣わしたイエスを殺そうとしている。「見よ、あなたたちの家は見棄てられる」は、預言者たちを殺し、イエスを殺す人々に裁きが下されることを告げている。エルサレムへの道を進むイエスの姿に、神の思いを見ることのできない民はその頑なさの故に裁きを受ける。しかし、この裁きを経なければ、神の救いは実現しない。「エルサレムよ、エルサレムよ」と嘆くイエスの言葉に耳を傾け、神のもとへと立ち帰るチャンスが差し出されている。

ⓒイエスは神の意思を行うために神から遣わされた。イエスが悪霊を追い出し、いやしを成し遂げるのは、苦しむ人のもとに神が来て救いを与えることを示すためである。そしてイエスは最も過酷な苦しみを背負うために、十字架の待つエルサレムへと進んで行く。神の思いを拒絶し続けた人々が、十字架のイエスを神が支えていることを知り、彼らが神の思いに身を合わせて生きる者となるために、イエスはエルサレムを目指す。